金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』と経蔵内収蔵庫について

角野玄樹

はじめに

本稿は、浄土宗大本山金戒光明寺所蔵の『黄檗版大蔵経』と経蔵内の収蔵庫についての報告である。

本報告にいたる経緯については、概ね以下のとおりである。

去る平成九年十二月から翌平成十年一月、調査願いがかない、佛教大学助教授松永知海氏と筆者角野玄樹が、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』の調査を行った。

この同寺所蔵『黄檗版大蔵経』は、既に京都国立博物館の赤尾栄慶氏によって調査がなされ、『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』（一九九六年）に報告されている。この『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』は、京都の社寺調査報告の一環であり、平成七年度の調査対象が、金戒光明寺及び山内塔頭寺院となったようである。この『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』では、彫刻、絵画、書跡、金工、漆工、染織の二八〇点もの什物類の調査報告がなされており、同寺所蔵『黄檗版大蔵経』も、それら報告のほんの一部なのである。すなわち、四五頁〜四六頁の通し番号一七九に、

179　黄檗版一切経　二〇八七冊

品質　紙本木版

時代　江戸時代

備考　施入記（経律異相巻二十一之二十三〈羅〉）（墨書・見返し）「奉納一切経洛東黒谷金戒光明寺／三十三世広誉順長代／延宝二甲寅年二月十四日／為中嶋常喜菩提也／施主同氏重昌」

施入刊記（法華要解七〈遠〉）「奉納一切経洛東黒谷金戒光明寺／三十三世広誉順長代／延宝二甲寅二月十四日／為中嶋常喜菩提也／施主同氏重昌」

（続高僧伝巻十七之二十下〈時〉）「奉納一切経洛東黒谷金戒光明寺／三十四世叶誉酉村代／延宝五丁巳年二月十四日／為中嶋常喜菩提也／施主同氏重昌」

（高僧伝目録一〈伊〉）「（同文）／三十五世通誉浪林代／（同文）」

と簡潔に報告している。また金戒光明寺に、各引き出しの冊数と套番号によって所在を示した別調書が提出されている。

平成九年十二月から平成十年一月までの調査は、これら京都国立博物館の報告を踏まえ、同寺所蔵『黄檗版大蔵経』の紛失本の有無や、書名単位での所在の確認をし、目録作成を目指したわけである。この目録により、どの引き出しにどの経律論疏等が存するのか明確になるわけである。(1)

また、経蔵内の収蔵庫に関しては、現在の収蔵庫は四面に引き出しのあるガラス張りのものとなっている。だが、経蔵建立当初にこの『黄檗版大蔵経』を収蔵していたのは、輪蔵であったと推測する。その後何らかの事情により、収蔵庫は、この輪蔵から三面に引き出しのある収蔵庫に移行されたと考える。そして更に、この三面引き出し収蔵

庫も取り払われ、現在の四面引き出しガラス張り収蔵庫になったのである。収蔵庫の変遷を図示する。

輪　蔵

←

三面引き出し収蔵庫

←

四面引き出しガラス張り収蔵庫

金戒光明寺所蔵の『黄檗版大蔵経』調査終了後、この収蔵庫の問題点を中心に、何度か金戒光明寺を訪問し調査を行った。すなわち、平成十年八月、角野が同寺所蔵の『日鑑』や『日鑑抄』を閲覧した。同年十月に松永氏と角野が同寺所蔵の絵図数点を閲覧した。

また、関係者である、故北川敏於元執事長や仏具屋井上秀峰の御主人のお話を伺った。

以下に、それら調査結果を述べる。

一、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』

金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』は、父母の追善のため銭屋中嶋重昌によって寄進されたものである。このことは、同寺所蔵『黄檗版大蔵経』に書かれている数種類の施入記と、経蔵に安置されている木牌によって知られる。

すなわち、施入記については、例えば、同寺所蔵『黄檗版大蔵経』の『大方広仏華厳経疏演義鈔』の見返に墨書で、

奉納一切経洛東黒谷金戒光明寺
三十三世　広誉順長代
延宝二甲寅年二月十四日
為中嶋常喜菩提也
施主　同氏重昌

とある。また、同じく『大般若波羅蜜経』の施入記では、

奉納一切経洛東黒谷金戒光明寺
三十四世叶誉酉村代
延宝五丁巳年二月十四日
為中嶋常喜菩提也
施主同氏重昌

と刷られ、これら見返や施入記によって、中嶋重昌が父常喜の菩提を弔うために、大蔵経を寄進したことが明らかであろう。

また、経蔵内安置木牌の表には、

俱会慶観常喜信士
幸観栄喜信女一処

と、法名がある（資料1）。そして、木牌裏には、

寛文十三癸丑年　　為両親蔵経全部寄附之
二月十四日
延宝六戊午年　　中嶋氏良喜重昌
八月十五日

とある（資料2）。この「為両親蔵経全部寄附之」から、重昌が父だけでなく母の追善のためにも、この『黄檗版大蔵経』を寄進したと判明するのである。そして、この木牌の表裏の記載より推定するに、寛文十三年（一六七三）二月十四日の年月日は、重昌の父常喜の命日と考えられる。ならば、続いて延宝六年（一六七八）八月十五日とあるのは、重昌の母（法名栄喜）の命日を示していると思われる。[2]

ところで、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』の施入記に、いくつか問題点が見られる。まず、先にも示した『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』の「黄檗版一切経」の項目では、同じ延宝二年（一六七四）の施入記でも、墨書のものと印刷のものがある。

次に、同じく『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』によると、『続高僧伝』「巻十七之二十」の施入記では、「三十四世叶誉酉村代」とあり、延宝五年（一六七七）の記が存する（この施入記の記載は、先に引用した『大般若波羅蜜経』と同じ）。この施入記のとおり、浅井法順『黒谷誌要』によると、延宝五年（一六七七）の時期の金戒光明寺法主は、三十四世酉村である。[3] しかし、『高僧伝目録』では、延宝五年（一六七七）の施入記でありながら、「三十四世叶誉酉村代」ではなく、「三十五世通誉浪林代」となっている。三十五世浪林が金戒光明寺法主になるのは、『黒谷誌要』によると、延宝五年（一六七七）よりあとの同九年（一六八一）である。したがって『高僧伝目録』の施入記の記載は、予盾するのである。可能性として考えられることは、『高僧伝目録』施入記の延宝五

年（一六七七）の記載が誤りなのか、明治期編纂の『黒谷誌要』の記述が誤りなのか、あるいは、延宝五年（一六七七）は寄進の年次であって、大蔵経の刊行または搬入の時期が、三十五世浪林の代ということであったのかもしれない。

いずれにせよ、このように金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』施入記には、延宝二年（一六七四）や延宝五年（一六七七）の記述、更に同じ延宝二年（一六七四）でも、墨書のものと印刷のもの、また、同じ延宝五年（一六七七）でも、三十四世酉村の代と三十五世浪林の代のものと、少なくとも四種類ある。これら施入記から、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』は、延宝二年（一六七四）や延宝五年（一六七七）、あるいは、延宝五年（一六七七）より後の三十五世浪林の代（延宝九年～元禄五年）等、断続的に刊行または搬入された可能性があるように思われる。

この施入記に関する問題点は、当然ながらほかの『黄檗版大蔵経』には見られない、金戒光明寺所蔵本の特色の一つである。そして、もう一つ特色をあげると、この同寺所蔵『黄檗版大蔵経』は、『黄檗版大蔵経』の販売目録である『全蔵漸請千字文朱点簿』や『大蔵経請去総牒』に掲載されていないのである。(4)

松永氏の指摘によると、これら二点の特色から、この金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』は、初刷りに相当する貴重な版ではないか、とのことである。従来の研究においては、延宝六年（一六七八）に後水尾上皇に献上された正明寺所蔵の『黄檗版大蔵経』が、初刷りのものとされている。ところが先にも述べたとおり、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』には、延宝六年（一六七八）より以前の延宝二年（一六七四）や延宝五年（一六七七）の施入の記録が存し、あるいはそれ以降の時期を示す記述（「三十五世通誉浪林代」＝延宝九年～元禄五年）もある。また、販売目録に記載されていないということも、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』が初刷りに相当するものであることを裏付けているように考えられるのである。

二、経蔵

金戒光明寺の経蔵は、御影堂の南方、観音堂の西にある。『黒谷誌要』に、

元禄二年称悦法師四方を勧進して一切経蔵を現地に建つ。[5]（大鼓楼の跡也）

とあるように、もともとこの経蔵の地には、大鼓楼があったようである。また、同書には、

○経蔵　御影堂の前面観音堂の西に在り。方五間重層宝形北面瓦葺也。元禄二年称悦法師諸方を勧進して之を建つ。納むる所の黄檗版一切経は中島良喜の寄進にかゝり。前面には釈迦牟尼仏座像を安置す側の傳大士は人見某の寄する所なり。[6]

とあることや、経蔵北側の柱に打ち付けてある寄進札から、元禄二年（一六八九）に建立されたと考えられる。[7]同寺所蔵『黄檗版大蔵経』施入記の延宝二年（一六七四）や延宝五年（一六七七）より、数年後のことになる。称悦法師が勧進し、経蔵建立が成就したという。この経蔵は、中嶋重昌（法名良喜）寄進の『黄檗版大蔵経』を納めるためのものと思われる。その時の金戒光明寺法主は、三十五世通誉浪林であった。釈迦仏の座像をまつっていたようで、この座像は現在も経蔵に安置されている[8]（資料3）。

なお、経蔵建立年次について、もう少し検討しておきたい問題がある。金戒光明寺所蔵の延宝六年（一六七八）五月二十五日の記述のある「裁許絵図写」と呼ばれる絵図に、書き込みで「経蔵　五間四方」の文が存在する（資料4）。延宝六年（一六七八）は、経蔵建立年次（元禄二年＝一六八九年）よりも時間的に先であるので、この絵図に経蔵云々の記があるのは少々おかしいことになる。

そこで実際に、この『裁許絵図』を拝見させていただいた。この『裁許絵図』は、金戒光明寺境内の絵図であり、その図中に文字も書き込まれている。経蔵云々の記は、絵図の欄外に記されており、図中に書かれている文字と比べて別筆であるように思われる。また、この絵図には経蔵らしき建物が描かれていない。

したがって、『裁許絵図』にある経蔵云々の記は、後世に後付されたと考えたほうがよさそうであり、経蔵建立年次は、やはり元禄二年（一六八九）と判断するのが妥当であろう。

ちなみに、経蔵の大きさについて、先に取りあげた『黒谷誌要』や『裁許絵図』には、「五間四方」とあった。しかし、『京都府指定・登録文化財等目録』の「金戒光明寺経堂」の項に「桁行三間　梁行三間」とある。柱間に依って何間かを判定するので、『京都府指定・登録文化財等目録』の「三間」でよい。『黒谷誌要』『裁許絵図』の「五間四方」というのは、寸法を測って「五間四方」ということであろう。

現在では、大蔵経を納める収蔵庫は、ガラス張りの昭和五十五年に作られた経壇である。しかし、経蔵建立当初は、伝えられるところによると、輪蔵であったらしい。その名残であろうか、経蔵内天井には四角い輪蔵の柱の跡らしきものがある。その輪蔵がいつの頃か、取り壊され、東西南の三面に引き出しのある収蔵庫になる。しかし、その三面引き出しの収蔵庫も取り払われ、現在のガラス張りの収蔵庫になるのだが、この大蔵経の収蔵庫の変遷については、後に詳述する。

経蔵の扉は東西南北の四面にある。その扉には、「唐戸寄進　大坂北濱貳町目　桑名屋仁兵衛」と陰刻していることから、寄進者の名が知られる。この桑名屋仁兵衛は、大阪の回船屋である。(9)

三、収蔵庫

経蔵内の収蔵庫は、少なくとも三度作られていると考えられる。最初は輪蔵で、これは経蔵建立当初のものであると思われる。二度目は北側に釈迦仏（または弥勒仏か）をまつり、残りの三面に引き出しをつけた収蔵庫、三度目はガラス張りの四面に引き出しのある現収蔵庫である。つまり、冒頭でも示したが、

輪　蔵
←
三面引き出し収蔵庫
←
四面引き出しガラス張り収蔵庫

という変遷が考えられる。

ここではまず、各収蔵庫の根拠・典拠や形態を整理し（1）、次に収蔵庫の変遷について検討する（2）。

1　各収蔵庫の根拠・典拠

最初の輪蔵についての根拠となるものは、第一に、経蔵内の天井の四角い跡で、輪蔵の痕跡を想起せしめる。これは松永氏の指摘である。第二に、この経蔵には傅大士像が存する。傅大士（四九七～五六九）は、輪蔵を発明した人物である。経蔵に、この傅大士像があるということも、輪蔵の存在を思い起こさせるのである。第三に、経蔵

の建築構造からも、輪蔵の柱が存在していてもおかしくないように感じられるのである。第四に、何に基づいて書かれたか不明だが、北川敏於著『黒谷に眠る人びと』四頁の経蔵の説明に、

元禄二年称悦法師の建立で、中央の輪蔵中には中島重昌寄進の黄檗版の一切経が納められている。

と、輪蔵であることを示している。また、輪蔵の指摘は、『大日本寺院総覧』上巻や府教育委員会編『京都の文化財』（一九八五年）にも見られる。このほか、経蔵の天井裏や現収蔵庫の下にある床を見れば、何か証拠となるものが発見できるかもしれない。今後の課題であろう。

形態は、輪蔵であるから、八角柱であったと想像されるが、その他の特徴は、現段階では全く不明である。

二番目の三面引き出し収蔵庫については、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』の目録『大明三蔵聖教目録』の帙の内側の朱筆の図が典拠となる（資料5）。また、後に詳述するが、この三面引き出し収蔵庫は昭和四十六年に、御影堂の本尊法然上人の宮殿に改造されることになる。故に当時の事情を知る一部の関係者のお話からも、その形態が確認できる。[10] ただし、写真等は残っていないようで、細部の特徴は不明である。

三番目に、現在のガラス張りの収蔵庫である。これは、昭和五十五年九月一日の金戒光明寺発行『紫雲』に、完成した旨の記事があり、収蔵庫の写真も一部分ながら掲載されている。各面に縦に四箱、横に三箱の一面十二箱、四面合計で四十八箱ある。ただし北南面の箱のほうが、東西面の箱よりも横幅が大きくなっている。

2　収蔵庫の変遷

収蔵庫の変遷について、もう少し詳しく述べる。

当初の輪蔵から、三面引き出し収蔵庫に改められたのがいつ頃なのかということであるが、これがハッキリしな

い。しかし、少なくとも、昭和九年の金戒光明寺火災以前には、輪蔵ではなく、既に三面引き出し収蔵庫になっていたものと推定される。[11]というのも、昭和九年火災前の本山の様子を記す絵地図を見ると、経蔵内の収蔵庫と思われる形は、輪蔵を示す八角柱でなく、四角柱であった（資料6）。この四角柱を示すものが、ここでいう三面引き出しの収蔵庫であった確証はないのだが、今のところ代わる意見はないのである。

何度も述べたが、この三面引き出しの収蔵庫の図は、本山所蔵の『黄檗版大蔵経』目録の帙内側に朱筆で記されている（資料5）。

この三面の引き出し収蔵庫は、昭和四十五年あるいは四十六年頃までは経蔵に残っていたようである。すなわち、金戒光明寺所蔵の『日鑑』昭和四十五年十二月二十一日の記述によると、『黄檗版大蔵経』が経蔵から宝蔵に移されている。これは、三面引き出し収蔵庫を改造し、御影堂本尊の宮殿に移動する準備を整えていたものと推測できよう。そして、『日鑑』昭和四十六年十月から十二月までの記や、『紫雲』の記事、[12]金戒光明寺関係者や工事の一端を担った仏具屋の井上秀峰の御主人のお話等を統合するに、昭和四十六年十月二十一日に、まず、御影堂の本尊を西座に移した。次に、翌日の十月二十二日に天蓋をおろす作業がなされた。そして、この年の十二月二十二日に、改造された経蔵の三面引き出し収蔵庫が、御影堂本尊の宮殿となって移動されたようである。

これら事業は、昭和九年火災後の本山復興においても、御影堂本尊法然上人像に予算の都合上、長い間宮殿がなかった、故に、昭和四十九年の法然上人御開宗八百年記念に先駆けて行われたようである。

ちなみに昭和四十七年一月一日の『紫雲』によると、翌日の十二月二十三日に御影堂で遷座式とお身拭い式が行われたという。この宮殿は平成十三年現在も存在する。

三面引き出し収蔵庫移転後の昭和四十六年から五十五年の約八年間、経蔵内の様子はわからない。そして、『日

鑑』昭和五十五年二月十二日の記に、伸和建設が経蔵修理を始めたとある。先に取りあげたが、昭和五十五年九月の『紫雲』に、この年の夏に、経蔵にガラス張りの四面引き出し収蔵庫完成の旨が記されている。この新設は、善導大師千三百年遠忌の記念事業の一つということである。

なお、現在の収蔵庫の本体は、この昭和五十五年に作られたことに間違いはないのだが、引き出しについては、前の三面の収蔵庫の引き出しをそのまま用いたと思われる。というのも、引き出しに墨書で、東西南北の記がある。これは、現在の四面収蔵庫にはあてはまらないのである。むしろ前の三面収蔵庫に合致し、それは資料5の大蔵経目録帙の図でも窺われる。

おわりに

以上、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』及び、経蔵内の収蔵庫について、調査報告をした。まとめると、

①金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』は、初刷りとされる正明寺所蔵本に相当する頃の版であると考えられる。

②この経蔵建立は元禄二年（一六八九）であり、経蔵内の収蔵庫については、建立当初は輪蔵であった可能性がある。輪蔵については、残念ながら、決定的な物的証拠の発見にはいたっていない。

③②と併せて、経蔵内収蔵庫の変遷は、

輪　蔵（元禄二年？～昭和九年以前？）

←

三面引き出し収蔵庫（昭和九年以前～昭和四十五年か四十六年頃）

←

四面引き出しガラス張り収蔵庫（昭和五十五年〜）

となる。

そして、課題がいくつか残った。

第一に、金戒光明寺所蔵『黄檗版大蔵経』の施入記についてである。延宝二年（一六七四）や延宝五年（一六七七）の記がある。両年とも、初刷りである正明寺本の献上年次（延宝六年）よりも前である。これら施入記より、同寺所蔵『黄檗版大蔵経』が初刷りに近い時期のものである根拠にもしているのだが、なお不明な点が存するということである。次に、施入記に墨書と印刷のものがある。なぜこのような違いがあるか、ということである。また同じ延宝五年（一六七七）でも、三十四世酉村の代のものと、三十五世浪林の代のものがある。延宝五年（一六七七）は三十四世の代であり、三十五世の代のものがあるのは、予盾する。この点に関しては、本稿において筆者なりの推論を述べたが、確定的な見解ではもちろんない。いずれの問題点も、今後の課題である。

第二に、本当に当初は輪蔵であったのかという点である。天井裏や現収蔵庫下の床部分に痕跡があることも推定され、今後の調査が望まれる。

第三に、本文では全く触れなかったが、金戒光明寺と後水尾上皇や黄檗宗との関係についてである。販売目録の『全蔵漸請千字文朱点簿』や『大蔵経請去総牒』に記載がないのに、金戒光明寺に『黄檗版大蔵経』が存在するのは、大きな疑問点である。金戒光明寺と後水尾上皇、あるいは黄檗宗とに、なにか関係があってのことではないだろうか。金戒光明寺所蔵の後水尾上皇や黄檗宗関係の什物の詳しい調査によって、なにか判明するかもしれない。

また、金戒光明寺には、未整理の史料が多くあると聞く。第一、第二の課題も含めて、それら史料の整理・調査

が待たれる。

註

(1) なお紛矢本は、『広弘明集』第二十一巻〜第四十巻、『大方広仏華厳経疏鈔』第一巻〜第三十巻、『仏祖統紀』第二十巻、第二十一巻である。

(2) ちなみに京都市姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編著『角川日本姓氏歴史人物大辞典二十六京都市姓氏歴史人物大辞典』(一九九七年)に、重昌の父「中嶋惣左衛門」の項目(四九一頁)がある。母栄喜の命日は示されていないが、父常喜の没年は、やはり寛文十三年(一六七三)とある。また、同書には、中嶋家の墓が黒谷山内にあると記しているが、山内のどのあたりなのか、所在までは明記していない。

(3) 『浄土宗全書』二十の三九二〜三九三頁参照。

(4) 両書とも黄檗山内の宝蔵院に所蔵されている。なお、『大蔵経請去総牒』については、滝善成「天海版・鉄眼版の重刻・補訂――特に大般若経について――」(『仏教史研究』五　一九七一年三月)に、山城国の購入者のリストをあげている。

(5) 『浄土宗全書』二十の四〇一〜四〇二頁参照。

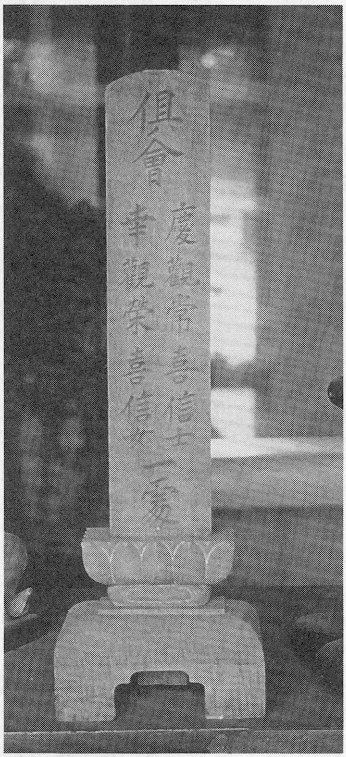
(6) 『浄土宗全書』二十の四〇四頁参照。

(7) 寄進札については、「元禄二年」の記は見えるが、以下の文字は、長年風雨にさらされているせいか、肉眼では読めなかった。ちなみに、『京都府指定・登録文化財等目録』の「金戒光明寺経堂」の項に「附寄進札　一枚」とあり、「元禄二己巳年三月十一日ニ入番之者也の記がある」と記載されている。

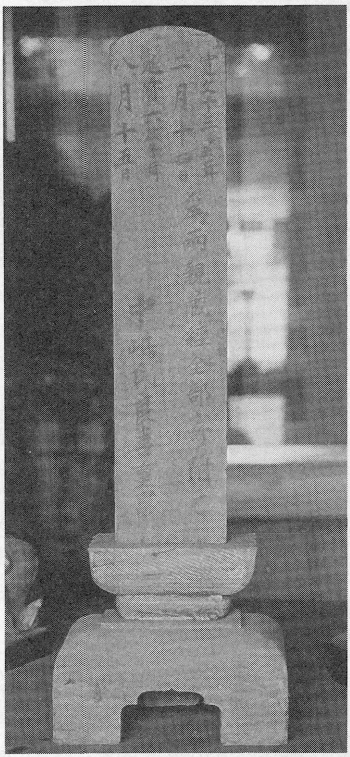
(8) 『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』二一頁には、弥勒像と判定している。
(9) 『大阪市史』第一（清文堂出版　一九一三年）の六五一頁参照。
(10) 例えば、仏具屋井上秀峰の御主人は、この収蔵庫の改造の際、漆を塗る作業を担当され、当時の収蔵庫の形態を語って下さった。
(11) 昭和九年に、金戒光明寺は火事で大殿などを焼失している。ただし、経蔵などは火難を免れている。
(12) 昭和四十六年十月一日、昭和四十七年一月一日の『紫雲』参照。

追記

なお、今回の一連の調査願いに対し、家田隆現執事長は、快く御許可を下さった。調査の際には、金戒光明寺関係者の皆様にお世話になった。とくに橋本周現学芸員には、御協力、御指摘をいただいた。また、当時の経蔵の様子については、今は既に亡くなられた故北川敏於元執事長、仏具屋井上秀峰の御主人に御教示をいただいた。更に経蔵について、文化庁の熊本達哉氏や京都府庁文化財保護課の引間俊彰氏にも御教示をいただいた。なお、本報告書は、佛教大学助教授松永知海氏の平成十年度浄土宗総合学術大会の発表資料を大いに参考にし、また、同助教授より御指導をもたまわった。皆々様方に厚く御礼申しあげます。そして故北川敏於元執事長には、生前の御協力を感謝するとともに、御冥福をお祈りいたします。



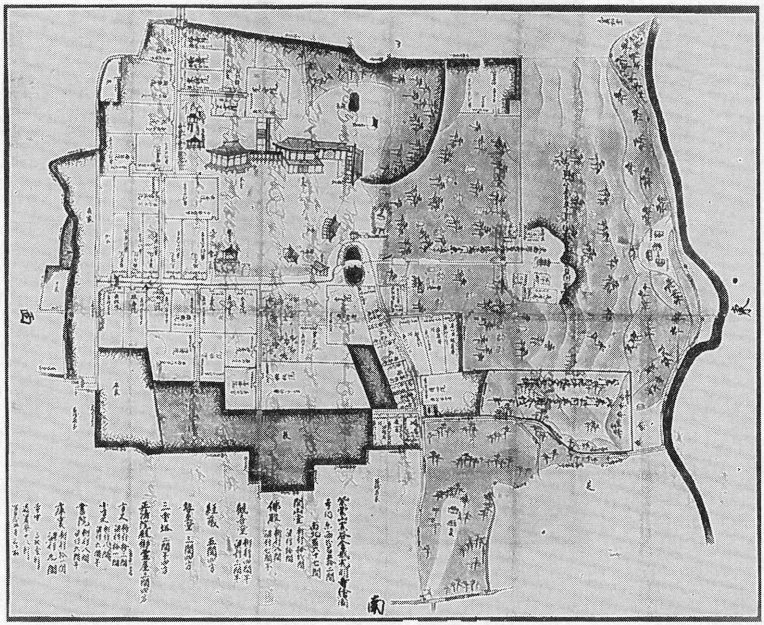
［資料1］



［資料2］

［資料3］

［資料4］



220 裁許絵図写（図37） 一幅

法量 九二・五×一一四・八

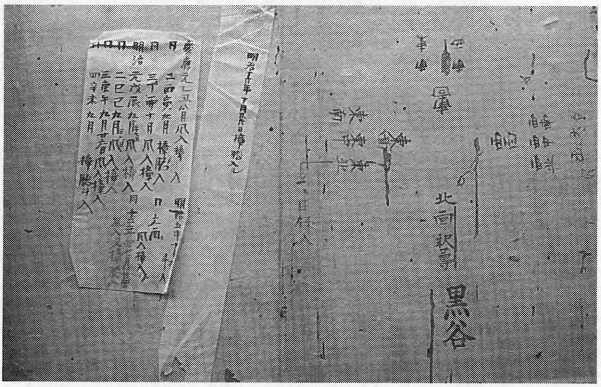
時代 延宝六年（一六七八）五月二五日

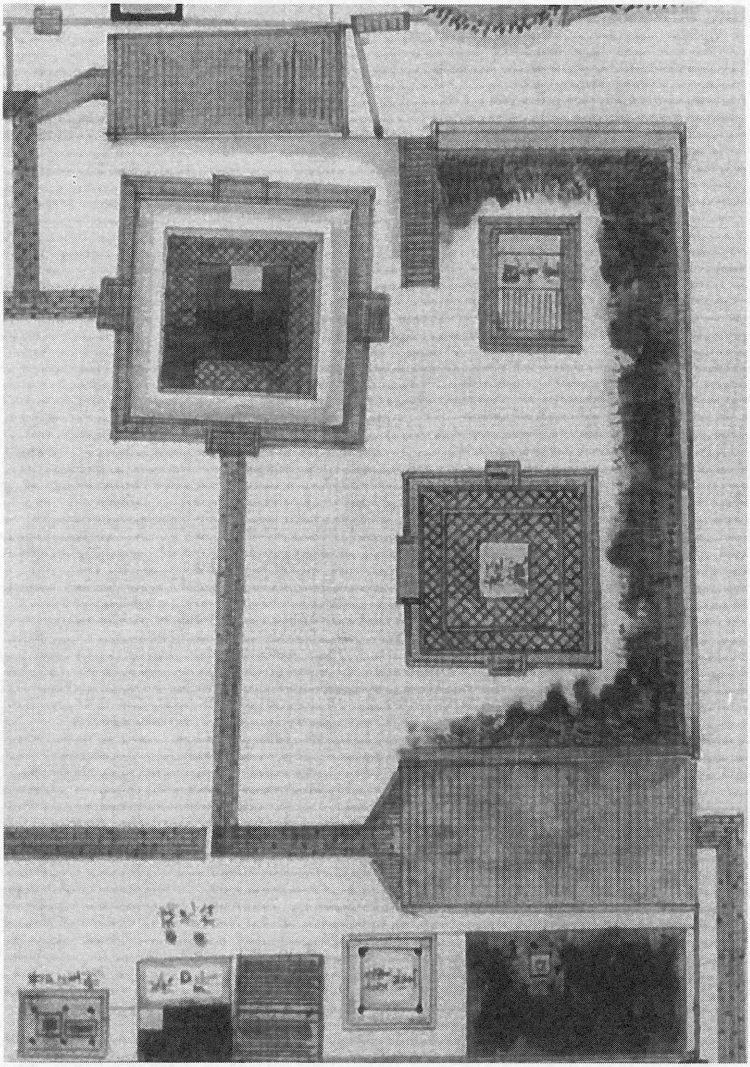
備考 「紫雲山黒谷金戒光明寺絵図」と題す。

裏に裁許文あり。

※この資料は『京都社寺調査報告十七（金戒光明寺）』一八頁と五〇頁のものを用いた。

［資料5］





［資料6］